

集団内の対人選好システムに関する研究(1)

太田 雅夫

A Study on the Interpersonal Preference System in Groups (1)

Masao OHTA

目 的

集団内の対人関係をシステムとして取り扱おうとする試みは、これまでもしばしばなされてきた。Taylor (1970) の指摘するように、集団成員間の関係の在り方や相互作用の諸相に注目するインターパーソナルな視座を社会的アプローチとし、対人関係の認知や相互作用からの秩序の推論に着目するイントラパーソナルな視座を心理学的アプローチとして区別することは一応可能である。

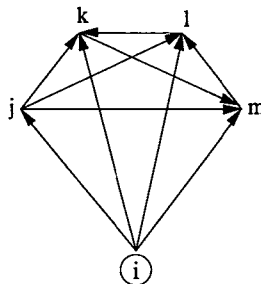
心理学的アプローチでは「バランス」、「認知的斉合性」、「認知的不協和」等の諸概念が取り扱われ、バランス理論的アプローチは、最も多くの検討が加えられた領域の一つである。

Heider (1958) のバランス理論では、人間PおよびOと非人間的対象XからなるPOX関係を問題とした。PO間の関係とPXとOX関係という二者関係と非人間的対象関係で、人間相互の関係は好意のような対人的感情関係であり、人間の非人間的対象に対する関係は、対象に対する態度等である。また非人間的対象を人間とした3人の人間の相互関係に関して類似の仮説をHomans (1950) は、たてている。Priceら (1966) やJordan (1966) も3人の感情関係を取り扱っている。

しかし対人選好システム研究にとっては、人間の感情関係とその認知にみられる均衡状況や均衡維持のメカニズムを追求することが重要であると思われる。他者に対する感情関係とその

認知によって、焦点人物がイントラパーソナルなシステムを形成するとみられるが、これは集団成員の間にみられる相互のシステム、すなわちインターパーソナルなシステムに深い関わりを持つものである。

Fig. 1 焦点人物iのj, k, l, mに対する感情関係とj→k, j→l, j→m, k→m, l→kおよびm→lの感情関係のiによる認知



ここでは、焦点人物が第2人称的相手に対して持つ感情関係、その相手が焦点人物に対して持つ感情関係の焦点人物による認知および第3人称的他者相互の感情関係の焦点人物による認知を取り上げ、この焦点人物を集団成員全員について調べることにしよう。

Fig. 1に示すように、集団i, j, k, l, mを想定し、iを焦点人物としたとき、i, j, k; i, j, l; i, j, m; i, k, l; i, k, m; i, l, m等の3者関係が考えられる。ここで例えばi, j, kの3者関係の場合、i→jはiのjに対する感情関係でC(i, j)と表わし、i→kはiのkに対する感情関係でC(i, k)と表わす。j→kはjのkに対する感情関係のiによる認知でC(i, j, k)

と表わし、 $k \rightarrow j$ は k の j に対する感情関係の i による認知で $C(i, k, j)$ と表わすことにしよう。ここでは、焦点人物 i の j, k に対する2者関係と j の k に対する関係の i による認知が含まれることになる。また、 i の j に対する感情関係に対して j の i に対する感情関係の i による認知 $C(i, j, i)$ も含まれている。

以上は i を焦点人物とした場合であるが、総ての成員を焦点人物とした場合について、以上の関係が同様に考えられる。この研究では、これら総ての成員に関する関係を総合的に検討することにする。

前回の報告で既に明らかとなったが、POX関係におけるPXとOX関係間の同意－不同意がPO関係に伴って変化する現象と類似の傾向が、Xを人物とした場合にもみられ、非人間的対象の場合と人間の場合に興味深い対応がみられたのである。即ち、ijk関係におけるikとjk関係の関連を相関係数をもって示すとき、相関がij関係に伴って変化する傾向がみられた。ここでは前回報告した結果をさらに詳しくみることにしよう。この場合、バランス理論との対応は考えるものの、非人間的対象に対する同意－不同意関係という概念は、非人間的対象を含まない3者関係に妥当しないという観点、つまり $i \rightarrow j$ と $i \rightarrow k$ の関係は第2人称的關係であり、 $j \rightarrow k$ の関係は第3人称的關係で、あくまでも認知関係であるとする観点を維持しながら進めることにする。

2者および3者をijkで表し、 i の j に対する感情関係と j の i に対する感情関係の i による認知、 i の j および k に対する感情関係と j の k に対する感情関係の i による認知を取り扱うことにしよう。

方 法

方法の詳細は、前回報告した通りであるが、概略を示すと次のようである。

被調査者；金沢市立泉野小学校6年の1学級、

32名（男子16名、女子16名）

調査用紙；調査用紙は、男子用、女子用各3問ずつからなり、第1問では、本人と同性の他者に対する本人の好悪感情を、第2問では、同性の他者それぞれの本人に対する好悪感情の認知を、第3問では、同性の他者相互の好悪感情の本人による認知を調べた。各問は7段階の評定尺度であり、とても好き（7点）からとても嫌い（1点）までであった。本来は1点から3点までは負の値として示し、5点から7点までを正の値として表わすことになるが、ここでは、1点から7点までの値として取り扱うことにした。

調査結果から焦点人物（ i ）の他者（ j ）および他者（ k ）に対する2者間の感情関係及び第3者（ j, k ）間の関係に対する焦点人物（ i ）の認知および他者（ j ）の焦点人物（ i ）に対する感情関係の焦点人物（ i ）による認知を中心として分析した。

調査日時；1991年6月19日、午前8時50分から10時10分まで。

結 果

- (1) i の j または k に対する感情関係、 j の i に対する感情関係の i による認知および j の k に対する感情関係の i による認知の平均および標準偏差

(A) $C(i, j)$ および $C(i, k)$ の水準別 $C(i, j, k)$ の平均および標準偏差

まず、 j の k に対する感情関係の i による認知 $C(i, j, k)$ の平均および標準偏差を、 i の j に対する感情関係 $C(i, j)$ および k に対する i の感情関係 $C(i, k)$ の水準別にみると、Table 1の通りとなる。 $C(i, j, k)$ の個数の総数は、 $n(n-1)(n-2)$ である。この学級は男女それぞれ16人であるから総数は各3,360である。しかし、この表では $C(i, j)$ または $C(i, k)$ の少なくともいずれか一方が4点（好でも嫌い

でもない) の場合が除かれているから、男子は1,794、女子は1,820しか計上されていない。

Table1 C (i, j) およびC (i, k) の水準別C (i, j, k) の平均および標準偏差

(男子)			
	M	SD	f
C(i,j)<3, C(i,k)<3	4.196	2.012	92
C(i,j)>5, C(i,k)<3	2.713	1.617	282
C(i,j)<3, C(i,k)>5	4.301	1.222	282
C(i,j)>5, C(i,k)>5	4.921	1.243	1138
(女子)			
	M	SD	f
C(i,j)<3, C(i,k)<3	4.085	1.754	176
C(i,j)>5, C(i,k)<3	2.957	1.392	422
C(i,j)<3, C(i,k)>5	4.512	1.120	422
C(i,j)>5, C(i,k)>5	5.243	1.120	1222

この表に示す平均は前述の通り「とても嫌い」を1点とし、「とても好き」を7点とした評定値の平均値である。したがって好きは正の値、嫌いは負の値としてみる必要のあるときには表中の値から4点を減ずればよい。

男子および女子のC (i, j, k) の平均をみると、C (i, j) > 5, C (i, k) > 5 の場合が最も高く、C (i, j) < 3, C (i, k) > 5 の場合がこれに続きC (i, j) > 5, C (i, k) < 3 の場合が最も少ない。所が、標準偏差をみると、最も大きいのはC (i, j) < 3, C (i, k) < 3 であり、続いてC (i, j) > 5, C (i, k) < 3 が大で、C (i, j) < 3, C (i, k) > 5 およびC (i, j) > 5, C (i, k) > 5 の場合は比較的小さい。

(B) C (i, j) およびC (i, j, i) の平均および標準偏差

C (i, j) またはC (i, k) は同数で総数は、 $n(n-1)$ であり、この学級の男女ではそれぞれ240となる。

このTable 2 によれば、男子、女子ともjのi

Table2 C (i, j) およびC (i, j, k) の平均および標準偏差

(男子)		
	M	SD
C (i, j, i)	4.621	1.266
C (i, j)	4.712	1.537
(女子)		
	M	SD
C (i, j, i)	4.621	1.266
C (i, j)	4.712	1.537

に対する感情関係のiの認知およびiのjに対する感情関係の平均は4から5の間にある。C (i, j, i) もC (i, j) も若干好意的であることを示している。認知と感情関係を比較すると、平均および標準偏差ともに認知より感情関係が大きくなっており、男子、女子とも同様の傾向を示している。自分の感情表現より、相手の自分に対する認知の方が、弁別が困難であることは、標準偏差の小という現象となって現われていると思われる。

(2) iのjまたはkに対する感情関係とjのkに対する感情関係のiによる認知との関連

(A) C (i, j) の段階別C (i, k) に基づくC (i, j, k) の回帰係数

C (i, j) の1から7までの段階別にC (i, k) に基づくC (i, j, k) の回帰係数を求めるとTable 3の通りとなる。C (i, j) の水準別のC (i, k) とC (i, j, k) の相関係数は前回報告済みであるから割愛した。

回帰係数B1は男子、女子ともC (i, j) の段階が高くなると、おおむね大きくなり、回帰は有意となる。この傾向は前回報告した相関係数の結果と符合する。kをHeiderのいうPOX関係のXと置き換えて考えると、これらの結果はPXとOXの同意と類似の関係がみられることになる。即ちHeiderによるとPOの関係が正となるとき、PXとOXの符号が一致する。つまり一

Table 3 C (i, j) の段階別C (i, k) に基づく C (i, j, k) の回帰係数

(男子)				
C (i, j)	B 1	B 0	T	DF
1	.011	4.164	.126	166
2	.111	3.707	1.132	110
3	.071	4.063	1.114	264
4	.290	2.992	8.458**	936
5	.386	2.579	11.541**	866
6	.514	1.924	12.815**	502
7	.739	.744	24.488**	502
(女子)				
C (i, j)	B 1	B 0	T	DF
1	-.072	4.630	-.619	152
2	.143	3.550	1.646	208
3	.191	3.581	3.089**	404
4	.215	3.569	4.018**	642
5	.515	2.140	12.737**	516
6	.535	1.973	17.286**	838
7	.654	1.239	20.726**	586

方が正なら、他方も正となり、一方が負なら、他方も負となるという同意現象がみられることになる。他方、POの関係が負となるとき、PXとOXは不一致となる。即ち、一方が正なら、他方は負となり、一方が負なら、他方は正となるという不同意がみられるという。これと類似した結果は、C (i, j) 別の回帰係数B 1や前回報告済みの相関係数によって認められる。C (i, j) の大きさに連れて、C (i, k) とC (i, j, k) との相関係数や回帰係数B 1が大きくなる。C (i, j) が5以上の段階は好意的であるから、C (i, k) とC (i, j, k) との相関係数や回帰係数が正となれば、バランス関係と類似することになる。ここでの結果は相関係数や回帰係数が正で、回帰が有意となっているから、仮定通りである。しかし、C (i, j) が小さな値をとるときには、C (i, k) とC (i, j, k) との相関係数や回帰係数B 1は小さく、回帰が有意とならないことが多く（男子では3以下の段階で、

女子では2以下の段階で有意でない）、女子では1の段階で負となる。つまり、自分が好意を持つ相手kに対しては、他者jは好意を持っていると認知しがちで、自分が非好意的な相手kに対しては、他者jも非好意的であると認知しがちである。その際、他者に対して、自分が多少非好意的であってもそのような認知をすることが、女子にはみられる。

C (i, j) が3以下の段階は非好意的感情関係であるから、C (i, j, k) とC (i, k) との相関係数および回帰係数が負となるとき、バランスの観点と類似する。しかし、C (i, j) が非好意的であって、相関係数および回帰係数が正となるという結果はバランスの観点とは符合しない。

(B) 個人ごとのC (i, j) の段階別C (i, k) とC (i, j, k) との相関係数

C (i, j) の段階別C (i, k) とC (i, j, k) の相関係数を個人ごとに調べてみよう。Fig. 2は男子女子別に相関が顕著なもののみ示してある。

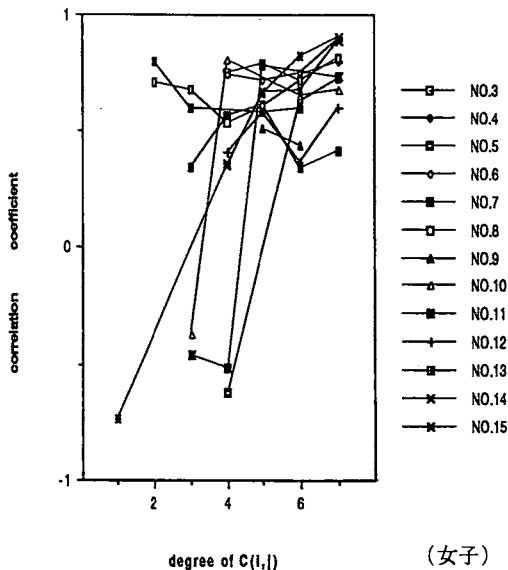
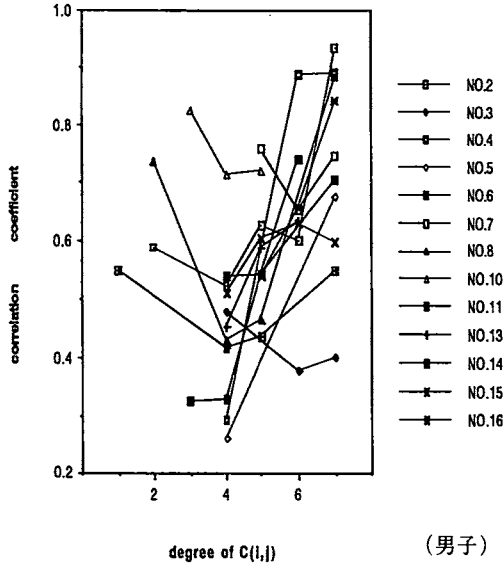
男子女子ともC (i, j) の段階の高い（4以上）場合が多く、低いときには少ない。また、C (i, j) の値が高くなるに連れてC (i, k) とC (i, j, k) の相関係数が高くなるものも多く、これが全体の傾向すなわち正の相関という結果になっているものと思われる。しかし、中にはそれに反する傾向を示す者もある。

男子では、C (i, j) の段階の低いとき、低くなるに連れて相関係数が高くなる者が多いが、女子では、C (i, j) が低いとき、相関係数が高くなる者と低くなる者とがみられる。この傾向が全体の相関係数における明確な傾向を薄めていると思われる。このような個人差が生じる原因については、今後検討の必要があろう。

(C) C (i, k) の段階別C (i, j) とC (i, j, k) の相関係数および回帰係数

Table 4は男子および女子のC (i, k) を1

Fig.2 個人ごとのC (i, j) の段階別C (i, k) とC (i, j, k) の相関係数



から7までの段階別にC (i, j) とC (i, j, k) との相関係数および回帰係数を示したものである。

C (i, k) の段階が低いとき、即ちiのkに対する感情関係が非好意的な場合、相関係数および回帰係数B1は負となり、好意的でも低い段階では負となる。回帰係数が有意とならないの

Table4 C (i, k) の段階別C (i, j) とC (i, j, k) の相関係数および回帰係数

(男子)					
C(i, k)	R(i,j,k) (i,j)	DF	B 1	B 0	T
1	-.276	78	-.319	3.492	-3.387**
2	-.357	69	-.399	4.912	-3.956**
3	-.426	157	-.393	5.650	-5.033**
4	-.147	418	-.105	4.593	-1.542
5	-.025	481	-.019	4.576	-.313
6	.181	228	.131	4.099	1.466
7	.316	235	.296	3.504	4.469**
(女子)					
C(i, k)	R(i,j,k) (i,j)	DF	B 1	B 0	T
1	-.484	99	-.395	4.953	-3.670**
2	-.294	119	-.301	4.253	-3.513**
3	-.252	237	-.235	4.845	-3.495**
4	-.046	255	-.032	4.475	-.362
5	.141	214	.116	4.253	1.405
6	.149	426	.109	4.382	1.661
7	.349	316	.238	4.045	3.087**

は男子女子共4から6の段階においてであり、1, 2, 3および7の段階では回帰係数の正、負で有意となる。

C (i, j) の段階別にみた場合、C (i, k) とC (i, j, k) の関係は、C (i, j) が非好意的であっても正となることがみられた。正の関係が優勢であるといえる。しかし、C (i, k) の段階別では、C (i, j) とC (i, j, k) の関係はC (i, k) が非好意的の段階であれば負になり、しかも回帰は有意となり、負の関係が優勢である。

C (i, k) の段階が非好意的であれば、C (i, j) とC (i, j, k) との関係は負となることが多く、女子ではC (i, k) が多少の好意的であっても負となる。C (i, j) とC (i, j, k) との関係はC (i, k) に連動しがちであったが、C (i, k) とC (i, j, k) との関連は、C (i, j) によって決まる傾向が強いということになる。つまり、自分が非好意的な相手kに対しては、

他者jに対する自分の感情関係と他者が相手kに対する認知は逆傾向になる。つまり自分の好意を持っている相手に対しては、自分の好意をもつ他者は非好意を持つと認知しがちであり、自分が非好意的な他者は好意を持つと認知しがちである。自分の非好意的な相手に対しては、自分が非好意的な他者であっても好意的であると認知しがちとなる。

これをハイダー理論との関連でみると、C(i, j)とC(i, j, k)との関係は、三者のバランスを作る傾向が強い。即ちC(i, k)が非好意的のときにC(i, j)とC(i, j, k)の関係が負となるから、C(i, j)とC(i, j, k)の一方が正となれば他方は負となる。これに対して、C(i, k)とC(i, j, k)との関係は、三者のアンバランスを作る傾向が強かったのである。即ち、C(i, j)が非好意的のときにあっても、C(i, k)とC(i, j, k)の関連は正であり、負が奇数個となる傾向がみられたということになる。

(D) C(i, j)およびC(i, k)の水準別C(i, j, k)とC(i, k), C(i, j, k)とC(i, j)の相関係数および回帰係数

C(i, j)およびC(i, k)の水準別のC(i, k)とC(i, j, k)間およびC(i, j)とC(i, j, k)間の相関係数および回帰係数を示すとTable 5の通りとなる。男子について顕著な相関係数を図示するとFig. 3の通りとなる。なお、図では比較のためC(i, j)とC(i, k)との相関係数も示してある。この2変数はiの2人の他者それぞれに対する感情関係で、ランダムな組み合わせであるから、全体ではあまり著しい相関係数は期待できないが、水準別には特色がみられるものと思われる。

前回の報告で、C(i, j)の水準によって、C(i, j, k)とC(i, k)との相関係数が変化することを明らかにした。即ち、C(i, j)が高い得点を示す、つまり好意的になるに連れて、C(i, j, k)とC(i, k)との相関係数が正で

高くなることを明らかにした。

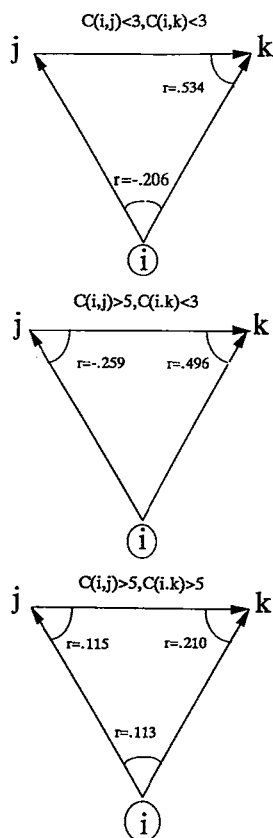
ここでは、C(i, k)およびC(i, j)の得点段階を3以下、5以上に大別しC(i, j, k)とC(i, j)の相関係数、C(i, j, k)とC(i, k)との相関係数を検討することにした。

Table 5 C(i, j)およびC(i, k)の水準別C(i, j, k) C(i, k), C(i, j, k)とC(i, j), C(i, j)とC(i, k)の相関係数および回帰係数

(男子)					
C(i,j)<3, C(i,k)<3	R	DF	B1	B0	F
C(i,j,k);C(i,k)	.534	90	1.282	1.268	1193.495**
C(i,j,k);C(i,j)	.038	90	.091	3.987	4.343*
C(i,j)>5, C(i,k)<3	R	DF	B1	B0	F
C(i,j,k);C(i,k)	.496	280	.912	.778	1045.746**
C(i,j,k);C(i,j)	-.259	280	-.494	5.557	265.592**
C(i,j)<3, C(i,k)>5	R	DF	B1	B0	F
C(i,j,k);C(i,k)	-.102	280	-.147	5.147	12.638**
C(i,j,k);C(i,j)	.026	280	.036	4.226	.686
C(i,j)>5, C(i,k)>5	R	DF	B1	B0	F
C(i,j,k);C(i,k)	.210	1136	.316	3.067	268.632**
C(i,j,k);C(i,j)	.115	1136	.174	3.901	78.783**
(女子)					
C(i,j)<3, C(i,k)<3	R	DF	B1	B0	F
C(i,j,k);C(i,k)	.174	174	.368	3.259	109.203**
C(i,j,k);C(i,j)	-.046	174	-.097	4.302	7.344*
C(i,j)>5, C(i,k)<3	R	DF	B1	B0	F
C(i,j,k);C(i,k)	.233	420	.413	1.988	238.147**
C(i,j,k);C(i,j)	-.025	420	-.047	3.240	3.126
C(i,j)<3, C(i,k)>5	R	DF	B1	B0	F
C(i,j,k);C(i,k)	.117	420	.173	3.466	28.005**
C(i,j,k);C(i,j)	.177	420	.253	3.917	56.611**
C(i,j)>5, C(i,k)>5	R	DF	B1	B0	F
C(i,j,k);C(i,k)	.193	1220	.291	3.488	244.860**
C(i,j,k);C(i,j)	.048	1220	.073	4.803	14.861**

まず男子についてみると、C(i, j) < 3, C(i, k) < 3の場合はC(i, j)およびC(i, k)が3以下であってもC(i, j, k)とC(i, k)との相関係数は正であるが、C(i, j, k)とC

Fig. 3 $C(i, j)$ および $C(i, k)$ の水準別 $C(i, j, k)$ と $C(i, k)$, $C(i, j, k)$ と $C(i, j)$, $C(i, j)$ と $C(i, k)$ の相関係数 (男子)



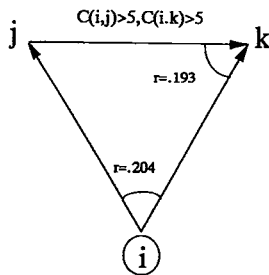
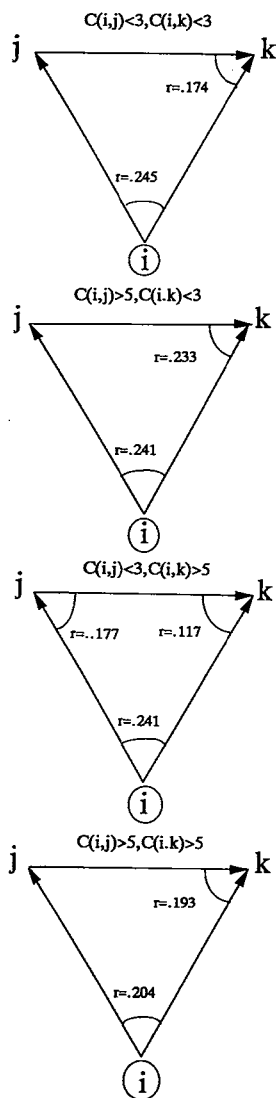
(i, j) との相関係数は顕著ではない。 $i \rightarrow j$ と $i \rightarrow k$ が何れも非好意的で、しかも $C(i, j)$ と $C(i, k)$ は負の相関関係を示す。

$C(i, j) > 5, C(i, k) < 3$ の場合は、 $C(i, j)$ が好意的で、 $C(i, k)$ が非好意的な場合であるが、 $C(i, j, k)$ と $C(i, k)$ との相関係数は顕著で回帰は有意となる。しかし、 $C(i, j, k)$ と $C(i, j)$ の関係は負で著しく、回帰は有意である。

$C(i, j) < 3, C(i, k) > 5$ の場合は、何れの相関係数も顕著とはならない。 $C(i, j) > 5, C(i, k) > 5$ の場合は、 $C(i, j)$ も $C(i, k)$ も好意的な場合であるが、 $C(i, j, k)$ と $C(i, j)$ との相関係数、 $C(i, j, k)$ と $C(i, k)$ との相関係数とも著しく回帰も有意である。

$C(i, j)$ と $C(i, k)$ との相関係数も顕著で回帰も有意となる。ここでは、現実の3者間における感情関係がすべて正となっている集団状況の場合が想定され、 $C(i, j)$ と $C(i, k)$ の正の相関係数および回帰係数は、これを反映していると考えられる。この3者は、バランスとなる可能性が大きい。

Fig. 4 $C(i, j)$ および $C(i, k)$ の水準別 $C(i, j, k)$ と $C(i, k)$, $C(i, j, k)$ と $C(i, j)$, $C(i, j)$ と $C(i, k)$ の相関係数 (女子)



女子の場合も、男子の結果と類似している。 $C(i, j) < 3$, $C(i, k) < 3$ の場合は、 $C(i, j)$ および $C(i, k)$ が3以下、即ち非好意的感情関係にあるが、 $C(i, j, k)$ と $C(i, k)$ との相関係数は正で顕著、回帰も有意となっている。また、 $C(i, j)$ と $C(i, k)$ の関係も正で顕著、回帰も有意である。 $i \rightarrow j$, $i \rightarrow k$ とも負という状況で、相関係数が正に関連している。

$C(i, j) > 5$, $C(i, k) < 3$ は $C(i, j)$ が好意的で、 $C(i, k)$ が非好意的という場合であるが、 $C(i, j, k)$ と $C(i, k)$ との相関係数、 $C(i, j)$ と $C(i, k)$ との相関係数は顕著である。 $i \rightarrow j$ は好意的、 $i \rightarrow k$ は非好意的という状況で両変数が正の相関係数となっている。

$C(i, j) < 3$, $C(i, k) > 5$ の場合には、 $C(i, j, k)$ と $C(i, k)$ との相関係数および $C(i, j, k)$ と $C(i, j)$ との相関係数は顕著で、回帰は有意となる。ここでも $i \rightarrow j$ が非好意的、 $i \rightarrow k$ が好意的という状況で、両変数は正に相関する。

$C(i, j) > 5$, $C(i, k) > 5$ の場合には、 $C(i, j)$ と $C(i, k)$ がともに好意的であるが、 $C(i, j, k)$ と $C(i, k)$ との相関係数は著しい。ここでも、 $C(i, j)$ と $C(i, k)$ の相関係数も顕著となる。

要するに、男子、女子に共通してみられることは、 $C(i, j)$ が好意的であれば、たとえその他の者に対する感情関係 $C(i, k)$ が非好意的であっても、 $C(i, j, k)$ とその他の者に対する感情関係 $C(i, k)$ とは相関係数および回帰係数が著しく高くなる。

(E) $C(i, j)$ および $C(i, k)$ の水準別 $C(i, j, k)$ と $C(i, k)$, $C(i, j, k)$ と $C(i, j)$, $C(i, j)$ と $C(i, k)$ の偏相関係数

Table 6 は男子および女子の $C(i, j, k)$, $C(i, j)$, $C(i, k)$ の3変数間の偏相関係数を $C(i, j)$, $C(i, k)$ の水準別に示したものである。

Table 6 $C(i, j)$ および $C(i, k)$ の水準別 $C(i, j, k)$, $C(i, j)$, $C(i, k)$ 間の偏相関係数

(男子)			
	R12	R13	R23
$C(i, j) < 3, C(i, k) < 3$.554	.179	-.269
$C(i, j) > 5, C(i, k) < 3$.506	-.282	.119
$C(i, j) < 3, C(i, k) > 5$	-.101	.023	-.026
$C(i, j) > 5, C(i, k) > 5$.199	.094	.091
(女子)			
	R12	R13	R23
$C(i, j) < 3, C(i, k) < 3$.191	-.092	.257
$C(i, j) > 5, C(i, k) < 3$.246	-.087	.254
$C(i, j) < 3, C(i, k) > 5$.078	.155	.226
$C(i, j) > 5, C(i, k) > 5$.187	.009	.199

$C(i, j, k)$ と $C(i, k)$ との偏相関をR12, $C(i, j, k)$ と $C(i, j)$ との偏相関をR13, $C(i, k)$ と $C(i, j)$ との偏相関をR23とすると、男子ではR12は3つの変数間の偏相関の中で最も大きくなることが多い。しかし女子ではR23が最も大である。

(3) i の j に対する感情関係と j の i に対する感情関係の i による認知の相関係数および回帰係数

Table 7 $C(i, j, i)$ と $C(i, j)$ の相関係数および回帰係数

	R	DF	B1	B0	F
男子	.743	238	.902	.544	637.108**
女子	.697	238	.927	.566	703.841**

Table 7 は、2者関係における感情関係とその認知に関するものである。 i の j に対する感情関係と j の i に対する感情関係の i による認知の相関係数および回帰係数を示している。この相関係数も回帰も正でかなり大きく、回帰は有意である。回帰係数B1も1に近い。このことは $C(i, j)$ とほとんど同じ程度の認知となっていることを示していると思われる。

考 察

バランス理論は一つのシステム・モデルとして取り扱われているが、感情関係とそれに基づく認知関係を全体として、均一なものとしてシステム化することは、慎重さを要するのではないかと考えられる。バランス理論に対するZajoncら(1965, 1967)をはじめとする様々な批評を基にして、さらに抽象度の高い概念構造を構築するには、三者間の現象を詳しく説明することが可能とならなければならないであろう。

従来からバランス理論をはじめ、集団のシステムを考える場合に、平衡性と平衡維持機構としての媒介過程あるいは媒介機構の存在を確かめようとする傾向が強い。この場合に対称的因果性が強調されるのは当然と思われる。しかし、感情関係とその認知を、対称的因果関係として理解することが妥当かどうかは、検討を重ねていかなければならないであろう。

ここでは焦点人物が第2人称的相手に対する感情関係に基づいて、他者同士の第3人称的相手間の感情関係の認知が予測しうるかどうかを検討した。しかし、感情関係とその認知の間に因果関係が成り立っているかどうかについては、さらに詳細な検討が必要であろう。

また、この研究では、3者間にみられる感情関係とその認知について検討し成員間の選好システムを解明しようとしたが、 $C(i, j, k)$ と $C(i, k)$ との関連が $C(i, j)$ に基づいて変するという顕著な傾向と、 $C(i, j, k)$ と $C(i, j)$ との関連が $C(i, k)$ に基づいて変化する傾向が認められた。しかし、これらの3者間関係をみる場合に、 $C(i, j)$ と $C(i, j, i)$ との関連つまり2者間の感情関係とその認知を加味して検討しなければならないであろう。焦点人物にとっては2種類の認知即ち $C(i, j, i)$ と $C(i, j, k)$ は、同一の重要性を持つであろうか。他者が自己に対して如何なる感情関係をもつかという認知とある相手が他者に対して如何なる感情関係をもつかという認知は、独立している

とも考えられるが、果たしてそうであろうか。この点に関してもさらに検討を加えなければならないであろう。

焦点人物を i としたときと、 j としたとき、 k としたとき等、各成員の感情関係やその認知は相互に影響をしあっていると考えられる。これらの相互作用に関しても今後考慮していかなければならないと思われる。

(付記) この研究を実施するに当たって、金沢市立泉野小学校の川原弘明教諭のご協力をいただいた。ここに衷心より感謝申し上げる。

参考文献

- Asch, S.E., 1946, Forming impressions of personality. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 41, 258-290.
- Bender, I.E. and A.H. Hastorf, 1953, On measuring generalized empathic ability (social sensitivity). *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 48, 503-506.
- Bruner, J.S. and R. Tagiuri, 1954, The perception of people. In G.Lindzey (ed.), *Handbook of social psychology*, vol. 2.
- Byrne, D. and D. Nelson, 1965, Attraction as a linear function of positive reinforcement. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 659-663.
- Byrne, D. and R. Ramey, 1965, Magnitude of positive and negative reinforcements as a determinant of attitudes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 2, 884-889.
- Cronbach, L.J., 1955, Processes affecting scores on "understanding of others" and "assumed similarity". *Psychological Bulletin*, 52, 177-193.
- Davis, J.A., 1963, Structural balance, mechanical solidarity, and interpersonal relations. *American Journal of Sociology*, 68, 444-462.
- Dymond, R.F., 1949, A scale for the measurement of empathic ability. *Journal of Consulting Psychology*, 13, 127-133.
- Dymond, R.F., 1950, Personality and

- empathy. *Journal of Consulting Psychology*, 14, 343-350.
- Festinger, L.A., 1957, A theory of cognitive dissonance. Row, Peterson and Co.
- Festinger, L.A. and H.A. Hutte, 1954, An experimental investigation of the effect of unstable interpersonal relations in the group. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 49, 513-522.
- Fiedler, F.E., 1964, A contingency model of leadership effectiveness. In L.Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. (1), 149-190.
- Hastorf, A.H. and I.E. Bender, 1952, A caution respecting the measurement of empathic ability. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 47, 574-576.
- Gamson, W.A., 1964, Experimental studies in coalition formation. In L.Berkowitz, ed., *Advances in Experimental Social Psychology*, vol. 1, Academic Press.
- Hastorf, A.H., D.J. Schneider and J.Polefka, 1970, Person perception. 高橋雅春訳 1978, 対人知覚の心理学 (キースラー, C.A.編, 広田君美監修, 現代社会心理学の動向 第2巻)
- Heider, F., 1958, The psychology of interpersonal relations. 大橋正夫訳, 1978, 対人関係の心理学.
- Homans, G.C., 1950, The human group. Harcourt, Brace and Co. 馬場明男, 早川浩一訳, 1959, ヒューマン・グループ, 誠信書房
- 岩下豊彦, 1964, 対人感情およびその知覚の機制に関する基礎的研究(3): 他者→自己, 他者→他者の対人感情の知覚, 心理学研究, 第35巻, 57-69.
- Jordan, N., 1966, Experimenting with the POQ unit: complications in cognitive balance. *Journal of Psychology*, 64, 3-22.
- Jourard, S.M. and P. Lasakow, 1958, Some factors in self-disclosure. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 56, 91-98.
- Laing, R.D., 1961, Self and others. 志貴春彦, 笠原嘉訳, 1975, 自己と他者
- Markus, H. and R.B. Zajonc, The cognitive perspective in social psychology. In G. Lindzey and E. Aronson (Eds.), 1985, *Handbook of social psychology* (third edition) Vol.1, 137-230.
- 大橋正夫, 1956, 選択行動と対人的知覚の研究(2); 他の成員別の成員に対する態度の知覚, 心理学研究, 第27巻, 193-203.
- 太田雅夫, 1986, 対人関係の研究; 自己と他者における対人認知の差異について, 金沢大学教育学部教育工学研究, 第12号, 79-91.
- 太田雅夫, 1986, 対人関係の研究; 自己と他者における対人認知の差異について(2) 金沢大学教育学部 教科教育研究, 第22号, 265-270.
- 太田雅夫, 1991, 集団構造に関する研究; 相互選択集団における重層構造と対人関係を中心として, 金沢大学教育学部紀要, 第40号, 45-53.
- 太田雅夫, 1992, 対人関係に関する研究; 3者間における好悪感情とその認知, 金沢大学教育学部紀要, 第41号, 45-54.
- 太田雅夫, 1994, 集団内の対人選好システムに関する研究(2), 金沢大学教育学部紀要, 第42号, 印刷中
- Price, K.O., E. Harburg and T. Newcomb, 1966, Psychological balance in situations of negative interpersonal attitudes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 265-270.
- Tagiuri, R., 1952, Relational analysis; an extension of sociometric method with emphasis upon social perception. *Sociometry*, 15, 91-104.
- Tagiuri, R., R.R. Blake and J.S. Bruner, 1953, Some determinants of the perception of positive and negative feelings in others. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 48, 585-592.
- Taylor, H.F., 1970, Balance in small groups. Van Nostrand Reinhold Co. 三隅二不二監訳 1978 集団システム論 誠信書房
- Thibaut, J.W. and H.H. Kelley, 1959, The social psychology of groups. John Wiley and Sons.
- White, P.A., 1958, The computation of eigenvalues and eigenvectors of a matrix. *Journal of the Society for Industrial and Mathematics*, 4, 393-437.

Zajonc, R.B. and E. Burnstein, 1965, The learning of balanced and unbalanced social structures. *Journal of Personality*, 33, 153-163.

Zajonc, R.B. and E. Burnstein, 1965, Structural balance, reciprocity and positivity as

sources of cognitive bias. *Journal of Personality*, 33, 570-583.

Zajonc, R.B. and J. Sherman, 1967, Structural balance and the induction of relations. *Journal of Personality*, 35, 635-650.